

日本における地域主体のスポーツ・ツーリズムの推進 ～連携組織設置による人材育成～

順天堂大学 合同チーム B

○宮澤奈都輝 鷺 周作 渡辺 真帆
小澤 惇 殿塚すみれ

1.背景

スポーツ・ツーリズムとは、日本の持つ自然の多様性や環境を活用し、スポーツという新たなモチベーションを持った訪日外国人旅行者を取り込んでいくだけでなく、国内観光旅行における需要の喚起と、旅行消費の拡大、雇用の創出にも寄与するものである(スポーツ・ツーリズム推進基本方針 平成 23 年 6 月 14 日)。

現在、我が国では観光庁が中心となりスポーツと観光事業を合わせたスポーツ・ツーリズム政策を行っている。各都道府県レベルでは、自治体のスポーツ振興課などがスポーツ・ツーリズム政策を行っているが、イベントや大会を行う際はスポーツ団体、観光団体、スポーツ関連企業、旅行関係企業等で主体があいまいになり、スポーツ・ツーリズム政策に関する全体像の把握や、総合化を困難にしている現状がある。その解決策として各団体間での効率的な連携は急務であり、関連する団体の情報・連携を取りまとめるネットワークの構築が求められている。

そこで、我々順天堂大学合同チーム B では、各団体の連携強化のためネットワークの必要性について言及する。

2.スポーツ・ツーリズムの必要性

スポーツ・ツーリズムを推進することで、新たな日本の観光のブランド創出や訪日モチベーションの向上、「観る」スポーツ、「する」スポーツのコンテンツ開発により旅行行動が増え、宿泊者や旅行消費の額が拡大する。また、若年層に魅力的なスポーツをテーマとした旅行商品作り推進することにより、若年層の旅行需要拡大などが期待できる(我が国スポーツ・ツーリズムの現状と課題 平成 23 年 11 月 2 日 観光庁)。このようなことから、スポーツ・ツーリズムが観光客の誘致に必要とされていることが分かる。

3.国内におけるスポーツ・ツーリズムの現状と課題

1)全国でも有数の観光地である沖縄県では、県内の観光事業において次のような 3 つの問題が挙げられている。

(1)まず 1 つ目は、観光客の集客数がシーズンで大きく増減し、安定性に欠けている点である。主に、3 月と 8 月に観光客が集中し、オフシーズン期の差が大きくなっている。これは、沖縄県に限ったことではないが、年間を通じた集客数の安定が求められる。

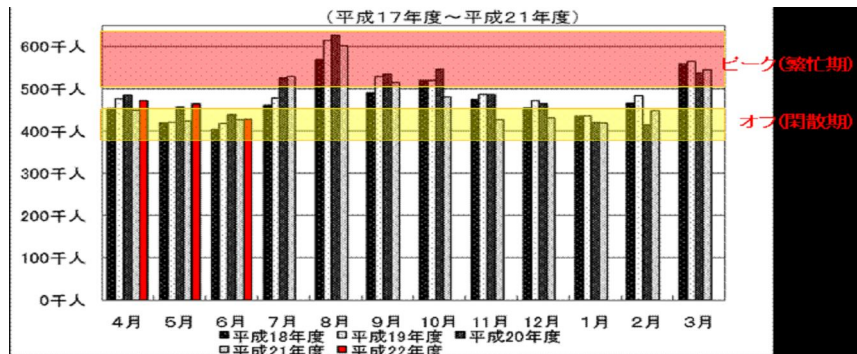


図1 月別観光客数の推移(2005~2009)

出典：沖縄県資料より作成

(2)2 つ目は、通年で安定しない集客数による影響である。シーズン時には仕事があった人がオフシーズン期に失業する割合が、沖縄県では他の県に比べ高くなっている。特に、沖縄県ではオフシーズン期の期間がシーズン期に比べ長く、通年雇用はオフシーズン期に合わせざるを得ない状況となっている。

(3)3 つ目は、観光客の所在地域を方面別でみた際に、首都圏が全体のほぼ半数を占めており、沖縄県は大都市依存型の観光地となっている点である。安定した集客の実現には大都市以外からの観光客の誘致も必要であり、交通面での課題も含んでいる。その例として、平成22年に行われた、第1回エコアイランド宮古島マラソンの参加者を挙げる。下の表から、地域別参加者数は沖縄県内を除き、主に関東と関西の大都市に偏っていることがわかる。このことから、沖縄県は大都市依存型の観光地といえる。

表3 第1回エコアイランド宮古島マラソン地域別参加者数

所在地域	フルマラソン	ハーフマラソン	合計
北海道	2	7	9
東北(青森、岩手、秋田、宮城、福島、山形)	4	1	5
関東(東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城、栃木、群馬、山梨)	164	122	286
東海(愛知、静岡、岐阜、三重、長野)	26	15	41
北陸(石川、富山、新潟、福井)	4	3	7
関西(大阪、京都、兵庫、滋賀、奈良、和歌山)	30	28	58
中国(広島、岡山、山口、鳥取、島根)	16	6	22
四国(香川、愛媛、徳島、高知)	2	3	5
九州(福岡、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島)	27	14	41
沖縄県内	539	585	1124
(2010) 合計	813	792	1605

出典：第1回エコアイランド宮古島マラソン報告書

2)現在日本国内では、沖縄県がスポーツ・ツーリズム実行委員会を設置、北海道と新潟県佐渡島でスポーツ・ツーリズム推進連絡会議が設置・運営されており、スポーツ・ツーリズムに特化した取り組みが行われている地域は上記の3つの地域に限定される(山岳観光

地におけるロングトレイルの展望（平成 24 年 3 月 22 日）。このことから、日本におけるスポーツ・ツーリズム体制は未だ発展途上であり、日本各地で連携するためにも組織数増強を図り、全国に展開する必要がある。

3)海外の事例

CSTA…カナダでは、スポーツ・ツーリズムへの取り組みが進んでおり、CSTA と呼ばれるスポーツ観光旅行同盟が存在する。2000 年 11 月にカナダの Tourism 委員会と協力して創設され、当初 18 人の創設メンバーから始まった CSTA であるが、現在では 125 の自治体、55 の国技組織と様々な製品・サービスの供給元を含む 300 人以上のメンバーに増大した。主なメンバーは、カナダ全域で主要な大都市圏と小さなコミュニティを含むあらゆる行政区、自治体からなる。ホテル、イベント管理会社、航空会社などもメンバーに含まれる。その目的として挙げているのが、カナダを好ましい観光旅行目的地として確立すること、スポーツ観光産業のイメージと側面を強化すること、連携強化のため通信機会を増やすこと、発達して工業ツールへのアクセスを容易にすること、公的で個人的なセクターからスポーツ観光産業への投資を構築すること、スポーツ観光産業の中で研究と活動のデータ収集を調整することなどである。

4.問題提起

1つの企業、自治体、クラブなどが大きなイベントや事業を行うには限界があり沖縄県のような問題を克服することは困難である。このことから、各団体が連携を強化できる組織の設立が急務であると我々は考える。

5.政策提言

学生中心の組織を作成する。スポーツ団体、観光団体、スポーツ関連企業、旅行関連企業等と連携をとりながらイベントなどの企画、運営やその補佐をする。

1)運営体制

管理・監督は複数の大学の教授が行い、各大学の学生がボランティアという形で運営・企画、広告、営業、大会運営スタッフなどの業務を担う。

2)主な事業

- (1)各組織間の情報共有を担う。
- (2)各県の特徴を活かした、一過性でないイベントを定期的開催。スポーツに限らない観光産業全体としての魅力をアピールする。(具体的な例の1つとして、プロスポーツチームのキャンプを誘致し、そのキャンプ地で県の物産品のブースを出展する大会を開催など)
- (3)学生の人材育成の機関としての役割を担う。

- (4)カリキュラムを作成し資格の取得を目指す。カリキュラムを組み、スポーツ・ツーリズムの専門知識などを学べるようにする。カリキュラムは具体的には、スポーツマネジメント論、スポーツ政策論、レジャー産業論などスポーツ・ツーリズム、スポーツマネジメントの領域のものを扱う。その後、イベント検定や体育施設管理士などの資格も取得できるよう目指す。
- (5)スポーツに特化しないイベントの開催。より地域にマッチングした魅力的な地域のイベントを行い、多角的なビジネスの創出、地域の安定しない集客数の増加とそれによる雇用の問題を解決していくために行う。

3)学生中心の組織にする理由

学生で行う利点として挙げられるのが、就職するための準備になるという点である。社会に出る前の準備段階にいる学生にとって実際に現場に出て、さまざまな経験を積むことができる。また、その経験からマーケティング能力、コミュニケーション能力、リスクマネジメント能力、ホスピタリティー能力など身に付けられ、学生の能力向上が期待できる。

4)組織作成後の将来展望

組織を作成し、自治体や企業と連携をとりながら、スポーツはもちろん、スポーツに限らないイベントを企画・運営していくことでその地域の新たな魅力を再発見し、観光客に新たな良さを知ってもらおう。またそのような取り組みを、日本全体に広めていくことで今まで観光客数が減少していた地域に新たな顧客を呼ぶことができる。後には、海外から日本に来る観光客を増やし、インバウンド・ツーリズムの拡大を図れるようにしていく。

6.まとめ

観光客が年々減少している中で、スポーツイベントの参加者数は増加している。発展途上のスポーツというコンテンツを通じ旅行産業の発展、観光客誘致および多角的なビジネスを創出することが必要だと我々は考える。そのためにもスポーツ・ツーリズム連携組織の設置が不可欠であり、人材育成の役割も担うことでさらなるスポーツ・ツーリズム産業の発展につなげる。

7.引用・参考文献

- ・スポーツ・ツーリズム推進基本方針～スポーツで旅を楽しむ国・ニッポン～
平成 23 年 6 月 14 日 スポーツ・ツーリズム推進連絡会議
- ・観光庁 「我が国スポーツ・ツーリズムの現状と課題」平成 23 年 11 月
- ・スポーツ・ツーリズム推進事業（戦略構築等業務）報告書 平成 23 年 3 月 沖縄県
- ・(岐阜経済大学、大阪体育大学、仙台大学、東海大学、広島経済大学、立教大学、北海商科大学、秀明大学、京都文教大学、山口大学) 公式 HP2012
- ・スポーツ・ツーリズム研究所
- ・国土交通省 観光庁 観光地域町づくり人材育成支援 2011